『西南アジア研究』No. 80, 2014

史上初の世界史家カーシャーニー
――『集史』編纂に関する新見解――

大　塚　　修

は　じ　め　に

イルハーン朝（1256-1335 以降）に仕えた有力政治家ラシード・アッディーン Rashīd al-Dīn[1]（1249/50-1318）が編纂した『集史 *Jāmi' al-Tawārīkh*』は，第 1 巻「モンゴル史」，第 2 巻「世界史」，第 3 巻「世界地誌」の 3 巻からなるペルシア語普遍史書である[2]。これまでに『集史』は，モンゴル帝国史に関する重要な一次史料としてだけではなく，中国，インド，ヨーロッパまでを対象とする「史上初の世界史」として高く評価されてきた。例えば，イラン史研究の碩学ボイル J. A. Boyle は「ラシード・アッディーン：最初の世界史家」という論稿の中で第 2 巻「世界史」を次のように紹介している。

> この巻はアダムと族長に始まり，ペルシアにおける前イスラーム時代の諸王，ムハンマドと 1258 年にモンゴルにより滅ぼされるまでのカリフ，ペルシアにおけるイスラーム時代の諸王朝，オグズと彼の一族およびトルコ人，中国人，ユダヤ教徒，ヨーロッパ人と皇帝・教皇，そして，仏陀と仏教に関する詳細な情報を含むインド人の歴史を物語る。事実上第 2 巻は，最初の世界史なのである。[Boyle 1971 : 21]

『集史』を史上初の世界史とする見解は多くの研究者に共有され[3]，我が国でも，その編纂事業は「重要な文化史上の大事件」と讃えられている［本田 1984 : 635］。今や『集史』は，数あるペルシア語史書の中で最も研究価値を見出されている作品と言っても言い過ぎではないだろう[4]。

このような『集史』に対する現在の評価を覆す可能性を秘めた証言が残されている。それ

1）ラシードの経歴については，少し古いが Togan 1964 が詳しい。

2）『集史』は，総序文の目次の中では 3 巻構成とされているが，その後ラシード自身が編纂した『真理の精妙 *Laṭā'if al-Ḥaqā'iq*』や『ラシード著作全集 *Majmū'a-yi Taṣānīf-i Rashīdī*』では，系図集が追加され，第 1 巻「モンゴル史」，第 2 巻「世界史」，第 3 巻「系図集」，第 4 巻「世界地誌」からなる 4 巻本であると紹介されている［LH : II 13-14 ; MTR : 2a-2b］。ただし，3 巻本であるにせよ 4 巻本であるにせよ，その内容を完全に保存する写本の存在は確認されていない。

3）枚挙にいとまがないが，例えば Jahn 1965 : x ; Jahn 1967 : 81 ; Pfeiffer 2013 : 62。

4）例えば，ブラウン E. G. Browne は『ペルシア文学史』（初刊 1920 年）において，「いずれにしても，歴史という領域において，価値でそれ（『集史』）に匹敵し得るペルシア語散文史料があるかは疑わしい」と述べている［Browne 1951 : 75］。

は，ラシードと同時代に活躍した歴史家カーシャーニー Abū al-Qāsim Qāshānī（1323/4 以降没）による，自分こそが『集史』の真の著者であるとする主張である。この主張は，先行研究の中でもたびたび紹介されてきたが（例えば Melville 2008 : 462a-462b），その真意を史料に基づいて検証しようとする研究者は現れなかった。本稿では，カーシャーニーによるペルシア語普遍史書『歴史精髄 *Zubdat al-Tawārīkh*』の文献学的考察を通じて，彼の主張の真意を明らかにした上で，ラシードの『集史』第 2 巻「世界史」の編纂過程に関する新見解を提示したい。

『集史』に関する文献学的研究は，現存写本の系統などを中心に，今日に至るまで精力的に進められてきた[5]。しかし，その多くは史料的価値の高い第 1 巻「モンゴル史」を対象とするもので，第 2 巻「世界史」を対象とする研究は実はさほど多くない。ヤーン K. Jahn とロウシャン M. Rawshan による翻訳と校訂テクストの作成[6]，美術史家による写本絵画研究が知られるが[7]，一方で，その編纂過程を詳細に検討した研究は管見の限り存在しない[8]。実は，カーシャーニーという非著名歴史家の著作に焦点を当てることによって，初めて第 2 巻「世界史」を含めた『集史』編纂の実態を明らかにすることが可能になるのである。

I　カーシャーニーと『集史』

1　カーシャーニーの主張

カーシャーニーは，イルハーン朝 8 代君主オルジェイト（在位 1304-16）の一代記『オルジェイト史 *Tārīkh-i Ūljāytū*』を著した際，その中で折に触れてラシードを批判し，自分こそが『集史』の真の著者であると主張した。彼は 706／1306/7 年の事件の一つとして，『集史』のオルジェイトへの献呈という出来事を挙げている。

（706 年シャウワール月）10 日金曜日／1307 年 4 月 14 日，イランの宰相 dustūr-i Īrān

5）『集史』の研究動向については宇野 2011 を，その他ラシードの著作活動全般の研究動向については岩武 1994 を参照。

6）第 2 巻を含む『集史』の全テクストの校訂出版は，ブラウンが 1908 年にその重要性を説いて以来［Browne 1908］，研究者の長年の悲願であったが，2013 年の JTII（『集史』第 2 巻「世界史」の前半部「天地創造からアッバース朝に至る歴史」）の出版によりついに実現した。ただし，極めて遺憾なことだが，ロウシャンが JTII の底本として使用したと考えられるイスタンブル写本（Istanbul, Topkapı Palace Library, MS. Hazine 1653）の該当箇所は，ティムール朝期にハーフィズ・アブルー Ḥāfiẓ-i Abrū が加筆したテクストで，『集史』のテクストとは似て非なるものである。ロウシャンは校訂の際に，底本にあるハーフィズ・アブルーに関係する記述を意図的に削除し［JTII : III 1531-1532］，『集史』のテクストとして刊行してしまったのである。したがって，実質的には，『集史』全テクストの校訂出版が JTII の出版をもって成し遂げられたとは言えない。本稿では，『集史』第 2 巻「世界史」の前半部「天地創造からアッバース朝に至る歴史」の内容を扱う際には，JTII ではなく『集史』第 2 巻「世界史」の諸写本を利用する。

7）美術史家による代表的な研究は Inal 1965 ; Rice and Gray 1976 ; Gray 1978 ; Blair 1995。

8）第 2 巻「世界史」研究の問題点と意義については白岩 1995 : 188 を参照。

ハージャ・ラシード・アッディーンは，このか弱き者（カーシャーニー）の著書・作品であった『集史 *Kitāb-i Jāmi' al-Tawārīkh*』を拒絶されしユダヤ教徒の手を通して王様（オルジェイト）に献呈し，その褒賞として私有地・村・不動産 amlāk wa dīh wa ḍiyā' から 50 トマンの正税を得た。また毎年，その土地の収穫物・農産物 maḥṣūl-i mustadrakāt wa ruyū'-i irtifā'āt から 20 トマンの現金が簡単に全て彼の下に送られる。一方，編纂の約定に反して bā wujūd-i wa'da-yi taṣnīf，1 ディルハムもその著者・作者には与えられなかった。大変な努力と沢山の苦労をし，幾年もかけて編纂したというのに。

苦労をしたのはこの私。ところが我が主（ラシード）は

それを彼の名前で完成させてしまった[9]［TUA : 160a ; TUH : 54-55］[10]

これをまとめると，彼の主張の骨子は，①『集史』の著者はカーシャーニーで，②その作品をラシードが横取りし，③ラシードの名前でオルジェイトに献呈し大金を得た，一方，④カーシャーニーへの褒賞は一切なかった，という 4 点に整理できる。彼は最終章でも，ほぼ同じ内容の主張を展開している［TUA : 241b ; TUH : 240-241］。

2　カーシャーニーの主張をめぐる見解

この『オルジェイト史』におけるカーシャーニーのラシード批判は，TUP の旧所有者シェーファー Ch. Schefer に紹介された後［Schefer 1895 : 12］，学界に広く知られるようになった。しかし，この主張はブロシェ E. Blochet の支持こそ得たものの［Blochet 1910 : 128-157］[11]，多くの研究者はそれに否定的な立場を取ってきた［Qazwīnī 1339 : 296-297 ; Nafīsī 1363 : 151, 733-734 ; Ṣafā 1372 : 1231-1232 ; Mudarrisī Zanjānī 1364 : 1-2, 15 ; 赤坂 1994 : 57, 61 ; Āl-i Dāwūd 1373 : 173b ; Daftary 2004 : 48-49 ; Afshār 1386 : xvi ; Melville 2008 : 462a-462b］。彼らはカーシャーニーをラシードの著作活動を補佐した助手の一人と位置付け，『集史』編纂への関与こそ認めるものの，著者ではありえないと反論する。そして時にその反論は，カーシャーニーを非難する形で展開される。例えば，ブレーゲル Yu. E. Bregel のペルシア語文献目録では，カーシャーニーの『歴史精髄』という著作は次のように紹介されている。

9）本稿の引用文中における丸括弧は筆者による補足を意味する。また祈願文は省略した。

10）現存する『オルジェイト史』の写本は TUA（1351 年書写）と TUP（19 世紀書写）の 2 写本である。ただし，TUP は TUA から直接書き写された写本だと考えられているため［Murtaḍawī 1385 : 495］，校訂する際底本とすべきは必然的に TUA ということになる。『オルジェイト史』には，この TUA を底本とした校訂本 TUH が出版されているが，そこには誤読を始めとする様々な問題点が見られ，TUH からその内容を正確に理解することは難しい。そこで，本稿では現存する最良の写本 TUA を使用し，参考として TUH の頁数もその脇に提示する。

11）ブロシェの評価については，Murtaḍawī 1385 : 452-544 で詳しく紹介されている。ただし，ブロシェはこれ以前の論考においては，カーシャーニーの主張に否定的な立場を取っていた［Blochet 1898 : 43-44 ; Blochet 1905 : 283-284］。

『歴史精髄』[？] ―― オルジェイトの治世 [703-716／1304-1316 年] に編纂された ―― は，アダムからバグダード陥落までの普遍史で，序 [イスラーム以前の歴史] と二つの部 [1 イスラーム以前のイランの王，2 ムハンマド以降] からなる。イスマーイール・ハーン・アフシャールが論じているように，『歴史精髄』は先行する幾つかの歴史書の簡単な集成にすぎず [例えば，ウトビーの『ヤミーニー史』，ニーシャープーリーの『セルジューク朝史』など]，アブー・アルカースィム・カーシャーニーは，『集史』の最新版の編纂をラシード・アッディーンに依頼された際，逐語的に書き写し，それどころか作品を自分の物としてしまったのである。[Bregel 1972 : 321]

『歴史精髄』というのは，ブロシェがカーシャーニーの主張を支持する際に論拠の一つとして用いた著作である。この著作は学界において，その存在すらほとんど認知されていない作品であったが[12]，近年，『歴史精髄』の「セルジューク朝史」の章に着目したモートン A. H. Morton が幾つか論稿を著している。興味深いことに，モートンもブロシェと同様に，カーシャーニーの主張を支持している [Morton 2004 : 23-25 ; Morton 2010 : 167]。どうやら問題解決の鍵となりそうなのは，『集史』編纂と何らかの関係が認められる『歴史精髄』という作品のようである。『歴史精髄』と『集史』を比較したブロシェとモートンはカーシャーニーの主張を支持し，その作業を行っていない研究者は総じて彼の主張を退けている[13]。

現在『歴史精髄』には，わずかに「セルジューク朝史」(ZTS) と「イスマーイール派史」(ZTI) の二つの部分校訂が存在するのみで，その作品全体へのアクセスは極めて難しい状況にある。こういった史料的な制約もあり，カーシャーニーの作品を検討しないまま，ラシードは偉大な歴史家でカーシャーニーはその助手の一人にすぎない，という評価が再生産されてきたのである。カーシャーニーがラシードのことを「我が主 makhdūm-i man」[TUA : 160a ; TUH : 55] と呼んでいることから，ラシードの方が上の立場にあったことが分かるが，これだけではカーシャーニーがラシードの助手であったことの証拠にはならない。同時代史料にはカーシャーニーがラシードの『集史』編纂事業を手伝ったという具体的な記述は一切存在しないのである。他方，カーシャーニーを支持するブロシェとモートンは，『歴史精髄』を部分的に検討しただけで，その全体像を再構成するまでには至っておらず，彼らの論証にも不十分な点は残る。したがって，まずはカーシャーニーと彼の手になる『歴史精髄』というマイナーな作品の検討から始める必要があるだろう。

---

12) イルハーン朝期歴史叙述に関する最新の概論 Melville 2012 の中でも紹介されていない。

13) カーシャーニーの主張に否定的な立場を取る研究者の中で，唯一アフシャール I. Kh. Afshār だけが『歴史精髄』のテクストに目を通している。アフシャールは『歴史精髄』とそれに先行する歴史書を比較した上で，前者は後者の剽窃であると結論付けた [Afshār 1312 : 28-29]。しかし，この理屈で『歴史精髄』を評価するならば，ほぼ同じ内容・章構成の『集史』第 2 巻「世界史」もまた前代の作品の剽窃だということになってしまう。アフシャールはこの点には触れず，『歴史精髄』を酷評し，『集史』を高く評価している。

II　カーシャーニーの経歴

『イラン大百科』の「アブー・アルカースィム・カーシャーニー」の項目からも分かるように，カーシャーニーの経歴に関する情報はほとんど残されていない［Soucek 1985］。彼は自著の中で，自分の名前を Abū al-Qāsim ʻAbd-Allāh b. ʻAlī b. Muḥammad b. Abī Ṭāhir al-Qāshānī［AJI[1]: 60a ; AJI[2]: 2b ; AJL : 124b］と表記している（"b. Abī Ṭāhir" の部分が脱落していることもある［AJI[1]: 2a ; AJL : 3b ; ZTB : 1b ; ZTT[1]: 189b-190a ; TUA : 138a］）[14]。曾祖父アブー・ターヒルはタイル職人で，以後その子孫からタイル職人を輩出したため，その名に因んで彼の家系はアブー・ターヒル家と呼ばれている[15]。ただし，カーシャーニーは，自身の職業を，タイル職人ではなく，歴史家 mu'arrikh［ZTT[1]: 190a など］，算術家 ḥāsib［AJI[2]: 2b］と記しており，彼は，これらの技能を生かしてイルハーン朝宮廷で活躍していたと考えられる。

彼の生没年に関する情報は残っていない[16]。ただし，ヒンドゥーシャー Hindūshāh b. Sanjar Nakhjiwānī（1330 頃没）著『先祖の経験 *Tajārib al-Salaf*』(1323/4 年)[17] の中に，カーシャーニーに対する「彼の人生が長く続きますように dāmat ayyām-hu」という祈願文があることから，この年にはまだ存命であり，没年はこの日付以降だと考えられる。ここでヒンドゥーシャーは，カーシャーニーのことを「識者たちの王，歴史家たちのお手本 malik al-afāḍil qudwat al-mu'arrikhīn」と高く評価している［TS : 325］[18]。

カーシャーニーの著作としては，現在三つの作品が知られている。これまでの研究において，彼の名前は，モンゴル帝国史研究者の間では『オルジェイト史』の著者として，美術史研究者の間では鉱物学書『鉱石の花嫁 *ʻArā'is al-Jawāhir*』の著者として知られており[19]，両作品については，校訂本も出版されている。一方，彼のもう一つの作品『歴史精髄』に関する研究は全くと言っていいほど進んでいない。

14）カーシャーニーの「カ」の子音には一貫して kāf ではなく qāf が用いられている。

15）アブー・ターヒル家については Watson 1985 を参照。カーシャーニーの兄弟ユースフ Yūsuf はヴァラーミーンにあるイマーム・ザーデ・ヤフヤーのミフラーブのタイル（1305 年作）の作者である。

16）カーシャーニーの没年に言及した唯一の記録は，17 世紀に編纂された『疑問の氷解 *Kashf al-Ẓunūn*』にある 836／1432/3 年という年記だが［KZ : 951］，これは彼が活躍した時代より 1 世紀も後の年記であり，信用性に欠ける。

17）アラビア語鑑文学作品『アルファフリー *al-Fakhrī*』（1302 年）を主要典拠とするムハンマドからアッバース朝までを対象とする歴史書。ヒンドゥーシャーは『書記典範 *Dastūr al-Kātib*』（1361-67 年）の著者ムハンマド Muḥammad b. Hindūshāh Nakhjiwānī の父親にあたる。

18）ヒンドゥーシャーはカーシャーニーの名前を Jamāl al-Dīn Abū al-Qāsim Kāshī と表記する。また，同時代の知識人ムスタウフィー Ḥamd-Allāh Mustawfī（1344 頃没）も同様に表記している［TG : 7］。

19）『オルジェイト史』を主要史料として用いた研究としては例えば Melville 1998 ; 杉山 2004 が，『鉱石の花嫁』を主要史料として用いた研究としては例えば Allan 1973 がある。

Ⅲ 『歴史精髄』

1 『歴史精髄』の写本

『歴史精髄』という作品を検討するためには，まず現存する写本から全体像を再構成する必要がある。現在筆者が存在を確認している写本は以下の7点である[20]。

① Tehran, Tehran University, MS. 5715［Dānish-pazhūh 1357 : 74-75］

256葉，ナスフ体，25行，23×16 cm（17×11 cm），ナフィースィー S. Nafīsī，イクバール ʻA. Iqbāl 旧蔵［Iqbāl Āshtiyānī 1324 : 40］，書写年：717年第1ジュマーダー月25日／1317年7月28日，写字生：ʻAbd al-Wahhāb b. Akhī Muḥammad b. Jastān b. Akhī Muḥammad al-Biyābānakī，書写地：ラシードの隊商宿（在スルターニーヤ），内容：天地創造からアッバース朝史まで（冒頭数葉欠葉，256-607／869-1211年の記事欠葉）

② Berlin, State Library, MS. Minutoli 237［Pertsch 1888 : 385-386］

224葉，ナスターリーク体[21]，17行，25.5×17.5 cm（18.5×12 cm），書写年：16-17世紀？，内容：天地創造からウマイヤ朝史まで（65／684/5年以降の記事欠葉）

③ Tehran, Valī-ʻasr Mosque，詳細不明［Dānish-pazhūh 1364 : 285］未見[22]

書写年：19世紀，内容：天地創造からムハンマドまで

④ Tehran, Tehran University, MS. 9067［Dānish-pazhūh 1364 : 284-285］

407葉，ナスターリーク体，19行，24×18 cm（18×13 cm），アフシャール I. Kh. Afshār 旧蔵，書写年：989年ムハッラム月／1581年，内容：天地創造からアッバース朝史まで（冒頭数葉欠，430／1038/9年以降欠葉），世界史

⑤ Tehran, Tehran University, MS. Adabīyāt 35J［Dānish-pazhūh 1339 : 147］

36葉，ナスターリーク体，19行，24×18 cm（18×14 cm），書写年：989年ムハッラム月／1581年，内容：ガズナ朝史（もともとは④の一部）

⑥ Tehran, Tehran University, MS. 5210［Dānish-pazhūh 1345 : 4152-4153］

116葉，ナスターリーク体，22行，22×17.5 cm（16×14.5 cm），書写年：1311年ズー・アルカーダ月／1894年，写字生：Faḍl-Allāh Khān Ḥaqīq（④から直接書写），内容：イスマーイール派史

---

20) トビリシ写本（Tbilisi, Institute of Manuscripts, MS. 84）を『歴史精髄』の写本として挙げる目録もあったが［Dānish-pazhūh 1364 : 285］，レザー・ダールヴァンド Ḥ. Riḍā Dālwand の写本調査の結果，この写本は『ワッサーフ史 *Tārīkh-i Waṣṣāf*』の写本であることが明らかとなっている［Riḍā Dālwand 1382］。

21) 目録では書体はシェキャステ体と記されているが，ナスターリーク体のように見える。

22) ダーネシュパジューフ M. T. Dānish-pazhūh は写本の所蔵先の一つとして，テヘランのヴァリー・アスル・モスクという名前を挙げているが，その詳細を説明していないため，現在この図書館がどこにあるのかは不明である。写本コレクションを所蔵する「ヴァリー・アスル」という名の図書館では，ガンバル・アリー・ハーン（ヴァリー・アスル）・マドラサが有名だが，その写本目録には『歴史精髄』という書名は存在しない［Ḥakīm 1386］。

⑦ Qazvin，詳細不明［Jahn 1963 : 200］未見

以上7点の写本の中で，筆者が調査できたのは①，②，④，⑤，⑥の5写本である。⑤は元来④の一部を構成する写本だと考えられるので，実質的に④と⑤は1つの写本ということになる[23]。また，⑥は1894年に④から直接書き写されたものなので，分析対象から外す。したがって，本稿で扱うべきは，①，②，④（と⑤）の3写本ということになる。残念ながら，いずれの写本にも欠葉が見られ，全体像を再構成するためには，これらの3点の写本を相互補完的に利用する必要がある。その結果は，表1に示した通りである。『歴史精髄』の対象は，「天地創造からアッバース朝に至る歴史」（序文有），「イスマーイール派史」（序文有），「アイユーブ朝史」，「グール朝史」，「マグリブ史」，「ルーム・セルジューク朝史」（序文有），「ガズナ朝史」，「セルジューク朝史」（序文有），「ホラズムシャー朝史」，「サルグル朝史」，「アレッポ史」，「ディヤールバクル・マウスィル史」，「イルビル史」，「ターヒル朝史」，「サーマーン朝史」，「フランク史」（序文有），「インド史」，「オグズ史」，「中国史」（序文有），「ユダヤ史」，と広範囲に及んでいる[24]。

この章構成は『集史』第2巻「世界史」の構成（表2）とほぼ同じだが，対象とする地域は『集史』よりも広く，アンダルス，シリア，アナトリアといった西方地域の歴史も含まれている。また，章の中には独自の序文を持つものがあったり，それぞれ独自の方式で節を区切るなど，各章が一見独立した作品であるかのような構成を持っている点も特徴として挙げられる。

2 『歴史精髄』の巻頭序文

巻頭序文の内容が唯一保存されているのはZTBである[25]。『歴史精髄』という書名こそ挙げていないが[26]，オルジェイトを賛美した後，その執筆動機を次のように説明している。

> （オルジェイトの）厳格な御勅令による要請に従って，時代の要求に応じて，諸事の変革のため，次のように望んだ。各時代の諸王・諸スルターンとイランの地 zamīn-i Īrān の王様・指導者たちの歴史と各時代の諸王・諸預言者・諸カリフの歴史を含む，7つの国の精髄にして地上の諸国の精選たる第4気候帯の歴史を，神に選ばれし者アダムの御

23）⑤は目録にはラシードの『集史』の写本として登録されているが，書体と紙質は④と完全に一致する。④では「ガズナ朝史」の章が脱落していることから，元来④の一部だったものが，登録の際に異なる写本として別々に登録された写本であると判断できる。

24）唯一『歴史精髄』の後半部を保存しているZTT[1]には頁の脱落と混乱が見られる。本稿では，ZTT[1]の内容に依拠して章構成を再現したが，本来の章構成とは順序が異なる可能性がある。

25）巻頭序文の一部は既にブロシェにより翻刻されている［Blochet 1910 : 140-142］。バスマラ，神と預言者への賛辞を含めた序文全文は筆者による翻刻（資料1）を参照。

26）そのため，ZTB写本の扉と小口には『歴史の髄 *Lubb al-Tawārīkh*』という書名が後世の人の手で書き込まれている。作品名が『歴史精髄 *Zubdat al-Tawārīkh*』であることは，本文中の記述から分かる［ZTT[1] : 66b : ZTT[3] : 85a］。ZTB写本ではこの部分は空白のまま残されており，書名を確認することはできない［ZTB : 102b］。

表1　『歴史精髄』の構成

章構成	ZTT[3]	ZTB	ZTT[1]
序文	欠葉	1b-2b	欠葉
天地創造	欠葉	2b-8a	1a-4a
1章：イスラーム前史	1a-83b	8a-102b	4a-66b
1節：ピーシュダード朝	1a-20b	9a-32a	4b-21a
2節：カヤーン朝	20b-39a	32a-50a	21a-35a
3節：アシュカーン朝	39b-51b	50a-63a	35a-43b
4節：サーサーン朝	51b-84b	63a-102b	43b-66b
2章：イスラーム史	85a-256a	102b-224b	66b-187b
1節：ムハンマド	85a-158a	102b-177b	66b-113b
2節：正統カリフ	158a-194a	177b-211a	113b-136b
3節：ウマイヤ朝	194a-231a	211a-224b（～65年）	136b-162a
4節：アッバース朝	231a-256a（256-607年欠葉）	欠葉	162a-187b（～430年）
イスマーイール派 1章：ファーティマ朝 2章：ニザール派	欠葉	欠葉	189a-238a
アイユーブ朝	欠葉	欠葉	238b-243b
グール朝	欠葉	欠葉	243b-247b
マグリブ史	欠葉	欠葉	247b-249a
ルーム・セルジューク朝	欠葉	欠葉	249b-255b
ガズナ朝	欠葉	欠葉	ZTT[2]：1a-36b
セルジューク朝	欠葉	欠葉	277b-294b, 欠葉, 266a
ホラズムシャー朝	欠葉	欠葉	266a-268b, 256a-265b
サルグル朝	欠葉	欠葉	295b-306a
アレッポ史	欠葉	欠葉	269a-269b
ディヤールバクル・マウスィル史	欠葉	欠葉	269b-273b
イルビル史	欠葉	欠葉	274a-275a
ターヒル朝	欠葉	欠葉	275a-275b
サーマーン朝	欠葉	欠葉	275b-276b
フランク史	欠葉	欠葉	308a-328b
インド史	欠葉	欠葉	329a-354b
オグズ史	欠葉	欠葉	356a-368b
中国史	欠葉	欠葉	370a-378b
ユダヤ史	欠葉	欠葉	380a-411b

*『集史』にも含まれる章については網掛けをして明示してある。

表2　現存『集史』の構成

第1巻　「モンゴル史」
第2巻　「世界史」
イスラーム前史
イスラーム史
ガズナ朝史
セルジューク朝史
ホラズムシャー朝史
サルグル朝史
イスマーイール派史
オグズ史
中　国　史
ユダヤ史
フランク史
インド史

世から太陰暦 700／1300/1 年である今この時に至るまで，ムスリム ahl-i islām の考えに従って，簡潔に手短に記すべきであると。そして，現在の人々・過去の先人の歴史について，有名で権威のある幾つかの書物 —— 例えば，カマール・アッディーン・イブン・アスィール Kamāl al-Dīn Ibn Athīr，サイード・カーティブ・ワーキディー Saʿīd Kātib Wāqidī の『歴史 *Tārīkh*』，『征服 *Maghāzī*』など —— から引用してきた。それが，『集史 *Jāmiʿ al-Tawārīkh*』の補遺 tamīma wa ḍamīma となるように。何故ならば，アジャムとアラブの歴史というのは，それ（『集史』）に比べれば，全ての中のほんの一部の，大本の中の枝葉の，大海の中の一河川にすぎない歴史なのだから。[ZTB : 2a]

以上の記述から，『歴史精髄』とは，①オルジェイトの命令により，②『集史』の補遺として編纂された，③アダムの時代から 1300/1 年に至る第 4 気候帯の諸預言者・カリフ・諸王を対象とする普遍史書で，④イブン・アスィール（1233 没）[27]，ワーキディー（823 没），『征服』の著者の 3 人が情報源に含まれていたことが分かる。

先行研究では，オルジェイト治世中の 1305-1316 年が『歴史精髄』の成立年代だと考えられてきたが [Jahn 1963 : 200]，ここにはそれ以前の年代が記されている。それどころか，1300/1 年というのはガザンの治世にあたり，オルジェイトの即位以前の年代である。ここでは，オルジェイトが即位後にラシードに『集史』編纂を命令する以前，すなわちガザンの治世に既に世界史の編纂計画があったことが示唆されている。しかし，ここでは執筆年代（ガザンの治世）とパトロンの名前（オルジェイト）に矛盾が生じているため，この序文の信頼度については別の記述をもとに更に検証する必要があるだろう。そのために，次に『歴史精髄』の各章の序文を検討したい。

3 『歴史精髄』各章の序文

巻頭序文では，序章 muqaddima（アダムからノア），1 章 qism（イスラーム前史），2 章（イスラーム史）という章構成が紹介され [ZTB : 2a-2b]，序章の記述が始まる。ZTB と ZTT^{3}の章構成は巻頭序文に書かれている通りだが，ZTT^1（と ZTT^2）には，この後に世界の諸王朝の歴史が続く。これらの諸王朝の歴史の章構成については，巻頭序文では言及されていない。その代りに，章の中には独自の序文を持つものもあり，全体として均整の取れた一つの作品というよりは，様々な作品の集成のような形になっている。

後半部の世界の諸王朝の歴史の最初に置かれているのが「イスマーイール派史」である。この章の序文は巻頭序文よりも長く詳細な内容になっている。そこには，カーシャーニーがガザンの命令を受け，トルコ，タジク，インド，ユダヤ教徒，ハター地方，チーン，マンズィー，フランク，キリスト教徒 naṣārā，ムスリム，キリスト教徒 tarsā，アラブ，アジャム，東方，西方の人々全てを含む『集史 *Jāmiʿ al-Tawārīkh*』の編纂を終えたと記されてい

27）イブン・アスィールからの引用は，実際に本文中でも確認できる [ZTT^1 : 198b ; ZTI : 45]。

る［ZTT[1]: 189b-190a; ZTI: 3］。この記述に基づけば，『集史』の著者はカーシャーニーで，その編纂はガザンの治世に始まっていたことになる[28]。そして，『集史』の完成後に「イスマーイール派史」を「『集史』という鞍の革帯に結び付けた」と記しており［ZTT[1]: 190a; ZTI: 4］，『集史』の完成後に新たに章を補っていたことが明言されている。

巻頭序文やこの序文に見られる『集史』の補遺（或いは一部）とするために，歴史を執筆したという表現は，その他の章の序文においても確認できる。序文が現存している章の中では，「フランク史」と「中国史」の序文に同様の文言が記されている［ZTT[1]: 308a; ZTT[1]: 370a, 370b］。また，「セルジューク朝史」の序文の中でも，その執筆動機は，世界の諸民族の歴史 tārīkh-i jumla-yi aṣnāf-i ʿālam を書くように命じられたためだと記している［ZTT[1]: 277b］。これらの記述からは，カーシャーニーが『集史』と呼ばれる作品に次々に章を書き足し，増補していた様子がうかがえる。したがって，必ずしも前半部「天地創造からアッバース朝に至る歴史」が最初に成立したわけではないようである。本稿では，ここまでカーシャーニーの世界史を『歴史精髄』と表記してきたが，実は，彼が『歴史精髄』という書名を用いているのは前半部「天地創造からアッバース朝に至る歴史」だけで［ZTT[1]: 66b; ZTT[3]: 85a］，後半部の諸王朝史では一貫して『集史』という書名を用いている。『歴史精髄』は『集史』の一部という位置付けのようである。ただし，カーシャーニーの世界史を『集史』と表記すると，ラシードの『集史』との混乱を招くおそれがあるので，本稿ではこれ以降も『歴史精髄』という表記を用いることにする。

4 『歴史精髄』の執筆年代

巻頭序文では執筆年が 700／1300/1 年となっていることは既に述べた。執筆年をこの年とする記述は，「ルーム・セルジューク朝史」でも見られ［ZTT[1]: 254b, 255b（図 1）］[29]，執筆時期はやはりガザンの治世と考えて間違いないようである。『歴史精髄』の中では「イスマーイール派史」と「中国史」以外の章ではガザンの名前は挙げられていない［ZTT[1]: 190a; ZTI: 3; ZTT[1]: 370a, 370b］。ただし，彼の別著『鉱石の花嫁』に，「本書の著者は公正なる王ガザン・ハーンにより，世界の歴史を集めるよう命じられた際，インド人の歴史について以下のことを知り得た」［AJI[2]: 50b-51a］[30] という記述があることからも，彼の世界史編纂はやはりガザンの命令によるものであったと考えるのが妥当だろう。

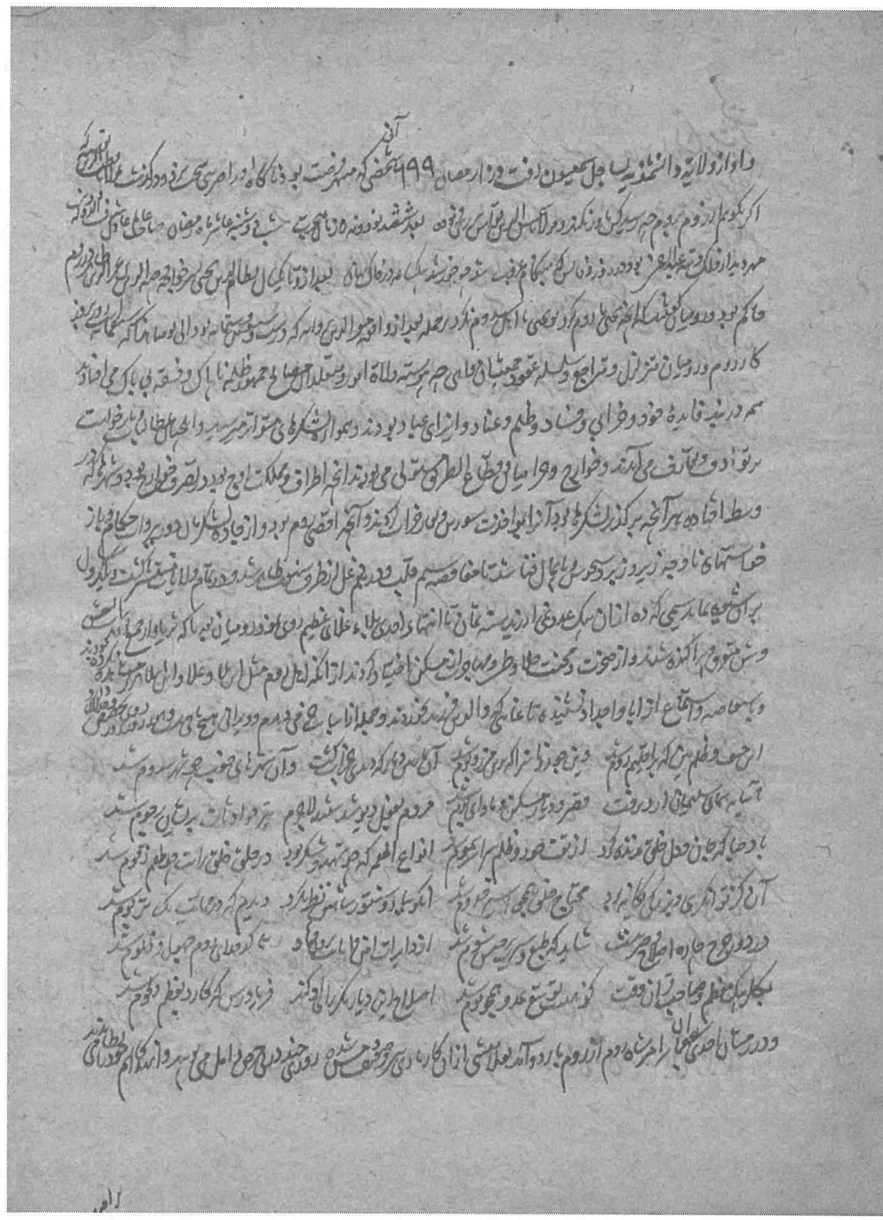
ところで，「インド史」の執筆年は 703／1303/4 年となっており［ZTT[1]: 347a］，全ての

---

28) モートンがカーシャーニーの主張を支持する根拠として挙げたのが，まさにこの記事である［Morton 2004: 23-25］。

29) 「ルーム・セルジューク朝史」の最後の記事は，執筆年より後の 701／1301/2 年の冬の事件になっており［ZTT[1]: 255b］，その後に加筆された形跡が見られる。

30) 『鉱石の花嫁』の写本にはラシードに献呈された系統の写本（AJI[2]）とタージュ・アッディーン・アリーシャー Tāj al-Dīn ʿAlī-shāh に献呈された系統の写本（AJI[1]，AJL）と二種類の系統があり，この一文はラシードに献呈された系統の写本においてのみ確認できる。



©Central Library and Documentation Center of the University of Tehran［筆者により掲載許可取得］
*4 行目に執筆年が 700／1300/1 年であることが明記されている

図 1　『歴史精髄』「ルーム・セルジューク朝史」の末尾［ZTT[1]：255b］

章が 700／1300/1 年に完成していたわけではないようである。各章がそれぞれ序文を持っており，独立した構造になっていることからも，世界史に組み込むために，章ごとに順々に編纂を進めていたことがうかがえる。そのために，執筆年にもずれが見られるのである。

700／1300/1 年に執筆された巻頭序文に，ガザンではなくオルジェイトの名前が記されて

いることについても，以上の『歴史精髄』の編纂の経緯から説明可能である。「インド史」には，711／1311/2 年，712／1312/3 年［ZTT[1]: 345b］，715／1315/6 年の記事が［ZTT[1]: 346a］，「イルビル史」には 709／1309/10 年の記事があることから［ZTT[1]: 275a］[31]，カーシャーニーはオルジェイトの治世にも『歴史精髄』の編纂を続けていたことが分かる。すなわち，巻頭序文における矛盾は，1315/6 年以降に『歴史精髄』を再編纂した際に，ガザンの名前をオルジェイトに置き換えたために生じたものだと考えることができる。『歴史精髄』には，ガザンの治世に書かれた情報，およびその後オルジェイトの治世に加筆された情報，という二つの情報の層が混在しているのである。

Ⅳ 『集史』第 2 巻「世界史」

1 『集史』第 2 巻「世界史」巻頭序文

前章では，カーシャーニーの『歴史精髄』はガザンの命令で 1300/1 年頃に編纂され，ラシードの『集史』よりも広い地域を対象とする世界史であることを確認した。先行研究では，『集史』の引き写しだと考えられていた『歴史精髄』がそれよりも早く成立していたとするならば，『集史』の内容との類似はどのように解釈すればいいのだろうか。続けて，ラシードの世界史の内容を検討したい。これまでの『集史』研究で注目を集めてきたのは，第 1 巻「モンゴル史」冒頭の総序文の記述である。一方，これは極めて奇妙なことであるが，ラシードの世界史を扱う際に，第 2 巻「世界史」の巻頭序文を分析した研究は管見の限り存在しない。巻頭序文を含む第 2 巻「世界史」の現存最古の写本 JTT[1]（717 年第 1 ジュマーダー月末日／1317 年 7 月 14 日書写）には次のように記されている。

> さて，これらの言葉を書きし者・これらの文章を記せし者・この構成を集めし者・この組み合わせを書き記せし者 —— 永遠にして慈悲深き御方（神）に祈りを捧げ賛美する者であるが —— は，本書の読者に申し上げる。時の運命の要請・時代の急激な変革により，世界の全ての人々の歴史，アダムの子孫の諸民族の有名な人々の行状・意志を書き記し，筆の運びの中に結び付け整理された。神様の支持・神様の恩恵の助けにより，東方から西方に至る七つの気候帯の全てが（整理された。そして，）イランの地 Īrān-zamīn の諸王・命令者たちの歴史を含む，7 つの国の中心にして地上の精髄・精選たる第 4 気候帯の歴史を，アダムの御世から 700／1300/1 年である今この時に至るまで，ムスリム ahl-islām の考えに従って書き記し，—— 責任は語り手にある ——，同時代人の著作から選び引用し，諸々の歴史書の補遺にしようと考えた。実のところ，本書は全

31）「イルビル史」［ZTT[1]: 274a-275a］は『オルジェイト史』の 710／1310/1 年の記事に相当する［TUA : 184a-186b ; TUH : 110-115］。『オルジェイト史』ではこの後に 717 年ムハッラム月／1317 年の記事が付け加えられている。また「インド史」の一部［ZTT[1]: 344a-346a］は『オルジェイト史』の 715／1315/6 年の記事に相当する［TUA : 215b-220a ; TUH : 184-194］。

ての中のほんの一部，大本の中の枝葉，大海の中の一河川にすぎないのだから。[JTT[1]: 1b-2a]

JTT[1]はラシードの存命中に作成された写本で，ロウシャンも「世界史」を校訂する際にこの写本を利用している[32]。その巻頭序文は，『歴史精髄』と比較してみると（資料1），単語や文章の構造がよく似ており，双方のテクストには明らかな関係性が見出せる。

『集史』第2巻「世界史」の巻頭序文の分量は『歴史精髄』の二分の一程度しかなく，内容も『歴史精髄』と比べて不完全である。そこには，著者名，パトロン名，書名といった著者が序文に書くであろう情報が記されていない[33]。作品の内容についても，「アダムの御世から1300/1年に至るイランの地の諸王の歴史」と説明され，インド，中国，ヨーロッパを扱った「世界史」である点には触れられていない。そして何よりも，序文の執筆年代である1300/1年というのはガザンの治世で，オルジェイトの即位以前の年代である。これは，オルジェイトの命令で編纂された『集史』の序文としてはありえない内容だと言える。この序文だけから判断すると，『集史』の記述の方が『歴史精髄』からの引き写しである可能性が高いように思われる。

2 『集史』第2巻「世界史」各章の序文

『集史』第2巻「世界史」において著者名を確認できるのは，唯一「イスマーイール派史」の序文である。そこには，パトロン名を明示せずに，トルコ，ハター，インド，ユダヤ教徒，キリスト教徒，フランク，西方，アジャムの人々の歴史を完成させた後，『集史』の補遺として「イスマーイール派史」の執筆に取り掛かった旨が記されている［JTI: 1-2］。この部分のテクストも巻頭序文と同様に，『歴史精髄』の対応部分とほぼ同じ内容と文体になっており［ZTT[1]: 189b-190b; ZTI: 1-5］，一見したところ，『歴史精髄』の序文を簡潔にまとめて，カーシャーニーという著者名の代りに，「医師ラシード Rashīd al-Ṭabīb」という著者名を書き加えたような形になっている。

ところで，「医師ラシード」という著者名は歴史書の序文に出てくる形としては，少し奇妙である。著者が作品の序文で自分の名前を記す場合，イスム，クンヤ，ニスバをもう少し詳しく記すのが一般的である。例えば，ラシードは第1巻「モンゴル史」では，Faḍl-Allāh b. Abī al-Khayrāt al-mulaqqab bi-Rashīd Ṭabīb Hamadānī と名乗っている［JTM: I 35］。また，

32) ただし，肝心の第2巻「世界史」の序文を校訂する際にはJTT[1]写本には目を通さなかったようで，写本間の異同を示す際に本写本には言及していない［JTII: III 1531-1532］。

33) 『集史』第2巻「世界史」の巻頭序文が保存されている写本は少ないが，そのいずれもが同様の内容になっている（JTG（1664年書写），JTL（1671年書写），JTR[2]（1840年書写），JTR[3]（1851/2年書写），JTME（19世紀書写））。JTT[2]（15世紀前半書写）では，ki du'ā-gū-yi ḥāmid-i qadīma-yi karīm ast の箇所に Aḥmad b. Muḥammad b. Muḥammad al-Bukhārī という名前が記されている［JTT[2]: 1b］。これは，写字生が書写する際に自分の名前に書き替えたものだと考えられる。

資料1 『歴史精髄』と『集史』第2巻「世界史」の巻頭序文

حمد و مدح و سپاس و آفرین و شکر بی‌قیاس بر حضرت جهان‌آفرین که صانع صنایع غریب و مبدع بدایع عجیب است، بر پروردگاری که مظهر عجایب و مُظهر بدایع و غرایب است، منزه از اضداد و انداد و معراء و مبراء از قرین و مقارنه و اشباه و ازواج و اولاد ـ جل جلاله تعالی و عم نواله و توالی ـ و آفریدگاری که تحریک زمانه از جهان سرایر مکتوبات دبیران مکنوناتِ خواطر و ضمایر کرد، صانعی که همه اطباق رواق آفاق را به حذاق جواهر نجوم منور و مزین کرد، قادری که به قبضهٔ تقدیر، چندین اشکال منیر به قالب تصویر تقدیر کرد، قادری که از روی تسخیر، چندین اجرام مستدیر در گرداب تدویر تحریر [نمود، و ظواهر] علویات را با جواهر سفلیات سلک کلک خیط تربیت و جود او کشید، و نهاد آدم را که عالم و علت غایی آفرینش است در سلسلهٔ مزینهٔ اخری او انداخت.	حمد و مدح وآفرین حضرت جهان‌آفرین را که صانع صنایع غریب و مبدع بدایع عجیب است، و شکر و ستایش پروردگاری را که مظهر عجایب و مصدر غرایب و بدایع است، منزه از اضداد وانداد، معرا از قرین و مقارنه ـ جل جلاله و تعالی و عم نواله و توالی ـ
و صلات صلوات متوالیات و درود تحف [تحیات] متواترات بر روضهٔ سلطان کاینات و نقاوه و خلاصهٔ موجودات، مقتداء انبیاء، محمد مصطفی ـ صلی الله علیه و آله و سلم ـ و آل و اولاد و اجداد آن حضرت باد.	و صلوات متوالیات و درود متواتر بر روضهٔ سلطان کاینات و خلاصهٔ موجودات، مقتداء انبیاء، محمد مصطفی و بر ریاض خلفاء و ایمهٔ مهدیین و صحابه و تابعین و انصار و اعوان و اولاد مطهر او باد.
امّا بعد، جامع این حکایات و مؤلف این مقدمات و مقرر این کلمات، ابو القاسم عبد الله بن علی بن محمد القاشانی بر رای مطالعان این تألیف و تنسیق، و مستفیدان این تصنیف و تلفیق، عرض می‌دارد که چون روزگار به عدل و رأفت خدایگان عالم، پادشاه بنی‌آدم، خاقان الترک و العجم، سلطان سلاطین العالم، ولی الله فی الارض، ناصر عباد الله، حافظ بلاد الله، غیاث الدنیاء و الدین، قامع الکفرة و المشرکین، قاهر الفجرة و المتمردین، ملاذ المؤمنین، اولجایتوسلطان بن ارغون‌خان بن آباقاخان بن هولاکوخان بن جنکیزخان ـ خلد الله سلطانه و اعلی شأنه ـ بیاراست، و از آثار عدل و عاطفت و مآثر مرحمت وتربیت، عرصهٔ عالم از مُنکرات و منهیات بپیراست ـ که ایام دولت عدل او، ما طلع الصباح و نادی المنادی بحی علی الفلاح پاینده ومستدام باد! ـ به حق الملک العلام، تایید یزدانی و یمن فر دولت ایلخانی، از تاریخ و تألیف سایر عالم تلفیق، و جماهیر مشاهیر بنی آدم مجموع هفت اقالیم، از ابتداء مشرق تا انتهاء مغرب فراغی نموده، در سبب تصانیف آن سلک کلک تحریر و تقریر منعقد ومنتظم گشت، بر وفق ملتمس فرمان نافذه ـ خلد ملکه ـ و حسب مقتضاء زمان وسبب انقلاب جدثان خواست که تاریخ اقلیم رابع که زبدهٔ هفت کشور و نقاوهٔ اقالیم ربع مسکون است، مشتمل بر احوال پادشاهان و سلاطین هر زمان، مهتر و سروران زمین ایران، و احوال ملوک و انبیاء و خلفاء هر عصر از زمان آدم صفی ـ علیه السلام ـ تا غایت وقت که تاریخ سنهٔ سبعمایهٔ هلالی است، بر زعم اهل اسلام بر سبیل ایجاز و اختصار بباید نوشت، واز کمیت متقدمان و کیفیت متأخران عصر و هر زمان اختیار و انتخاب از چند پاره کتاب تواریخ معروف معتبر مشتهر التقاط کرده آمد؛ چون کمال الدین ابن اثیر و تاریخ سعید کاتب واقدی و مغازی و غیر آن، تا به تتمه و ضمیمهٔ جامع التواریخ شود، چه از روی حقیقت، تاریخ عجم و عرب نسبت با آن، تاریخ جزوی است از کلی، و فرعی از اصلی، ونهری از بحری است. و اصول آن مشتمل است بر یک مقدمه و دو قسم.[ZTB : 1b-2a]	به موجب ملتمس وحسب قضاء زمان و سبب انقلاب دوران، تواریخ سایر طوایف عالم و سیرت و سریرت جماهیر مشاهیر امم بنی آدم تالیف یافت و در سلک کلک منعقد و منتظم گشت، به عون تایید یزدانی ویمن ربانی، مجموع هفت اقالیم از ابتداء مشرق تا انتهاء مغرب خواست که تاریخ اقلیم رابع که واسطهٔ هفت کشور است و زبده و نقاوهٔ ربع مسکون تالیف و تصنیف کند مشتمل بر احوال پادشاهان و فرماندهان ایران زمین از دور آدم تا غایت وقت که تاریخ سنهٔ سبعمایه است بر زعم اهل اسلام. و العهدة علی الراوی. و از کتب متاخران انتخاب و التقاط کند. و تتمه و ضمیمهٔ کتب تواریخ شود و به حقیقت، این جزوی است از کلی، و فرعی است از اصلی، ونهری از بحری. و این کتاب مشتمل است بر مقدمه و دو قسم.[JTT[1] : 1b]

『集史』の後に編纂された諸著作の中では，Faḍl-Allāh b. Abī al-Khayr b. ʻĀlī al-mushtahar bi-l-Rashīd al-Ṭabīb と名乗っている［SHP : 1b ; KT : 1b ; KS : 118b ; LH : I 35 ; BH : 1 ; AA : 256 ; WN : 35］[34]。微妙な表現の違いこそあれ，ラシードが自分の名前を名乗る際には，「医師ラシードとして名高いアブー・アルハイルの息子ファドル・アッラー」という表現を用いていたようである[35]。それに対して，「イスマーイール派史」の序文に見られる「医師ラシード」という表現は，ラシード本人が序文を書く際に用いる表現としては適当ではないように思われる[36]。

「イスマーイール派史」以外で，『集史』という書名を確認することができるのは，「セルジューク朝史」，「ユダヤ史」，「インド史」の序文である［JTS : 3 ; JTB : 1 ; JTH : 2］。『歴史精髄』各章の序文では，『集史』の補遺としてという書き方が多かったが，『集史』第 2 巻「世界史」各章の序文では，この作品こそが『集史』であるという書き方になっている。このことは，カーシャーニーが執筆していた時点では，未だに完成していなかった『集史』が，ラシードの執筆時には既に完成品として念頭にあったことを示しているのではなかろうか。

3 『集史』第 2 巻「世界史」の執筆年代

『集史』第 2 巻「世界史」の編纂は 1304 年に即位したオルジェイトの命令で始められた。しかし，巻頭序文には，1300/1 年という彼の即位以前の執筆年が記されている。第 2 巻「世界史」には，これ以外にも，「インド史」の執筆年 703／1303/4 年［JTH : 4, 66］，「中国史」の執筆年 704／1304/5 年［JTK : 7, 11, 34, 37］，「フランク史」の執筆年 705／1305/6 年［JTF : 17, 18, 19, 39, 122］という年記が見られ[37]，これらの年代は一応はオルジェイトの治世に含まれる。しかしながら，オルジェイトの即位は 703 年の最後の月ズー・アルヒッジャ月 17 日／1304 年 7 月 21 日であるので［TUA : 149b ; TUH : 30］，即位後直ちにオルジェイトが命令を下したと仮定して，はたして，703 年の残り 10 日余りで，「インド史」を執筆し始めることが可能だったろうか。その他の章についても同様で，いくら沢山の助手を使ったとしても，1～2 年という短期間で，全く白紙の状態から，現代の歴史家に「史上初の世界

---

34) ただし，最後の一例だけ al-Hamadānī が ʻĀlī の後ろに挿入されている。また，神学著作の一つ『タフスィールの鍵 *Miftāḥ al-Tafāsīr*』では，Faḍl-Allāh b. Abī al-Khayr b. ʻĀlī al-mulaqqab bi-Rashīd al-Ṭabīb という，第 1 巻「モンゴル史」の自称表現に近い形が採用されている［MT : 40］。

35) ただし，ラシードは序文ではなく，『集史』第 1 巻「モンゴル史」の本文中では，二箇所で「医師ラシード Rashīd Ṭabīb」という自称表現を用いている［JTM : II 1283, 1311］。この用例の存在については，赤坂恒明氏にご教示頂いた。記して謝意を表する。

36) 『集史』第 2 巻「世界史」の写本には，「イスマーイール派史」が脱落しているものが多い。例えば，前節で扱った『集史』写本の中で，「イスマーイール派史」を含むのは JTT[2]だけである。この写本では著者名が書かれる箇所が空白のまま残されている。

37) 705／1305/6 年にアフィーフ・アッディーン ʻAfīf al-Dīn という絵師がラシードの著作の挿絵を作成していた，という証言もある［MAA : 478-479］。この著作が『集史』であるのかは分からないが，『集史』であるとすれば，この時点で本文の大部分は完成していたことになる。

史」と評価される程の内容の「フランク史」や「インド史」を編纂することが果たして可能だったろうか。この完成までの余りに短い時間もまた，「世界史」編纂の構想がガザンの時代から存在していたことを示唆している。

V　カーシャーニーの主張の真意

1 『集史』第2巻「世界史」の情報源『歴史精髄』

『歴史精髄』と『集史』第2巻「世界史」のテクストの間には強い関係性が見出され，前者の編纂年代の方が早い。それだけではなく，オルジェイトの治世に編纂された『集史』第2巻「世界史」には，ガザンの治世の年代も確認できる。これらの証拠からは，カーシャーニーが『集史』を盗作し『歴史精髄』を著した，という定説とは正反対の仮説，すなわち，ラシードがカーシャーニーの世界史を書き写した，という可能性が導き出される。実は，その動かぬ証拠が第2巻「世界史」のテクストの中に残されている。

第2巻「世界史」の現存最古の写本は714／1314/5年に書写されたアラビア語版『集史』JTEである[38]。その第2章の冒頭には，朱色で次のような題字が書かれている［JTE : 39a］。

القسم الثانى من زبدة التواريخ فى ذكر احوال سيد الاصفياء محمد المصطفى عليه افضل الصلوات و اكمل التحيات. و ذلك على ثلثة اقسام

何と『集史』のテクスト中の表題の一つが「『歴史精髄 *Zubdat al-Tawārīkh*』の第2章」となっているのである。実は，この箇所の写真は，ブレア Sh. Blair が第2巻「世界史」のハリーリー写本のファクシミリ版を出版した際，その解題の中に掲載している［Blair 1995 : 20］。この表題の記述は，万人の目に触れるような状態にあったにもかかわらず，これまで誰もこの問題の箇所に注意することはなかったのである。また，この写本の第1章の末尾には「本書の著者が706年ラジャブ月2日／1307年1月7日に記した」とあり［JTE : 38b］，第2巻「世界史」の前半部第1章の編纂がこの年に行われたことまでがこの写本からは明らかになる。

また，この表題が確認できるのは，JTEだけではない。第2巻「世界史」のペルシア語版のほぼ全ての写本では，表題は次のように記されている［JTT[1] ; JTR[1] : 58b ; JTT[2] : 57b ; JTG : 57a ; JTL : 55a ; JTQ : 18b ; JTMS : 26b ; JTR[2] : 48a ; JTR[3] : 58b］[39]。

38）『集史』第2巻「世界史」のアラビア語訳。JTEと714／1314/5年書写のハリーリー写本（London, Khalili Collection, MS. 727）との関係については諸説あったが，現在では別写本ではなく，同一の写本から切り取られ別々に伝わった残簡であるとする説が有力になっている［Blair 1995 : 15-36］。本稿ではこれに従い，JTEの書写年をハリーリー写本の書写年である714／1314/5年とした。同一写本ではないと仮定した場合でも，書写年が14世紀初頭であることは間違いないように思うので，本稿の論証には影響しないだろう。

39）本稿では，ミーノヴィー図書館に所蔵されるJTT[1]の影印本（Tehran, Minovi Library, No. ‘A399 & No. ‘A400）を参照した。影印本からは写本にふられている頁番号を確認できなかった。この記述は影印本No. ‘A400の50頁目で確認できる。

قسم دوم از زبدة التواريخ در ذكر سيد الاصفياء محمد مصطفى عليه افضل الصلوات و التحيات ...

その中でも，ラシードの存命中に書写されたJTEとJTT[1]のテクスト中に「『歴史精髄』の第2章」という表題が存在することは，『集史』の編纂過程を再考する上で見逃せない事実である[40]。少なくとも，『集史』第2巻「世界史」の第2章「イスラーム史」に関しては，1307年に，『歴史精髄』から書き写されたものであると断定しても間違いないだろう。

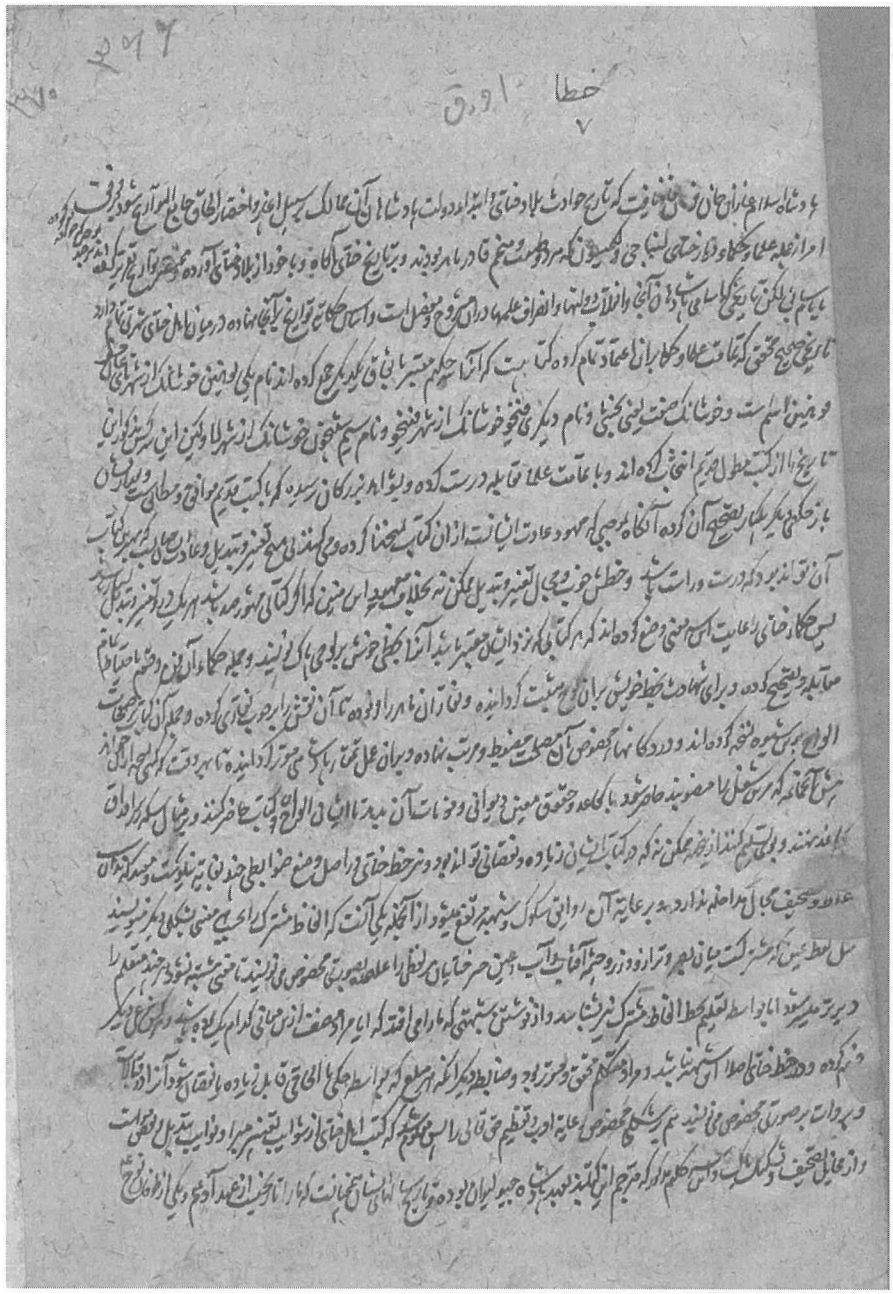
第2巻「世界史」が『歴史精髄』にほぼ完全に依拠した作品であると考えれば，第2巻「世界史」のテクスト中に見られる様々な矛盾点を説明することも可能となる。『歴史精髄』の序文からカーシャーニーの名前やガザンの名前を消すことにより，オルジェイトの治世に編纂された『集史』の序文に矛盾しないような形への書き替えが行われ，その上，修辞を凝らしたカーシャーニーの序文が簡潔に書き直されている。それを象徴する事例として，「中国史」冒頭の序文の事例を紹介したい。『歴史精髄』における「イスラームの王であるガザン・ハーン（の治世に？）命令が下された。中国の地の諸事件とその王国の諸王の王朝の起源を，簡潔明快な形で『集史』に補うようにと」[ZTT[1]: 370a（図2)] という文章が，『集史』では「イスラームの王はお命じになられた。その王国（中国）とその地の諸王の歴史を簡潔明快に補うようにと」[JTK: 8] という形になっており，ガザンの名と『集史』の補遺として編纂された，というその編纂の経緯に抵触する部分が削除されている。ただし第2巻全体としては，編纂を急いだためか，「『歴史精髄』の第2章」という記述や不完全な冒頭序文など，『集史』のテクストとしては不自然な点も幾つか残されている。

2　『集史』編纂の過程に関する新見解

以上の考察から，カーシャーニーが自分こそが『集史』の真の著者だと主張した真意は，ラシードの『集史』第2巻「世界史」の情報源は，彼自身がガザンの命令で編纂を続けていた『歴史精髄』である，という点にあったと考えられる。

カーシャーニーは世界の諸民族を対象とする『歴史精髄』の初版を700／1300/1年にガザンに献呈し，その後も新しい章の編纂に従事していた。おそらく章ごとに少しずつ編纂し，それが完成した段階で，『集史』という書名をつける予定だったと考えられる。各章ごとに序文が付されているのはそのためであろう。そのような中で，1304年にガザンが亡くなりオルジェイトが即位した。ガザンに「モンゴル史」の執筆を命じられていたラシードは，即位したオルジェイトに完成した「モンゴル史」を献呈したところ，それに「世界史」と「世界地誌」を加筆するように命じられた。その時に，ラシードが目を付けたのが，自分と交流のあった歴史家カーシャーニーの『歴史精髄』であった。ラシードは既に完成しつつあった『歴史精髄』に少し手を加え，『集史』第2巻「世界史」に相応しい形に書き替えた。この作

40）唯一の例外として，19世紀に書写された写本の中で，「『集史』の第2章」という表題が確認できる［JTME: 92］。



©Central Library and Documentation Center of the University of Tehran［筆者により掲載許可取得］
*1 行目に「イスラームの王であるガザン・ハーン」という記述が見られる。『集史』の対応する箇所ではガザン・ハーンの名前は削除されている

図 2　『歴史精髄』「中国史」の冒頭［ZTT[1]：370a］

業をラシード自身が行ったのか，カーシャーニーに行わせたのか，それとも他の歴史家に行わせたのかは分からない。ただし，ラシードが目を通していたら，訂正したであろう記述が幾つか残っており，ラシード自身が手を加えたとは考えにくい[41]。そして，遂に706／1307年，ラシードは3巻本『集史』のオルジェイトへの献呈を果たしたのである。

もちろん筆者は，カーシャーニーが主張しているように，ラシードが盗作を行ったと結論するつもりはない。前近代の歴史叙述においては，先行する作品のテクストからその著作名に言及せずに引用するということは当たり前に行われていた。ラシード自身も『集史』におけるテクストの引用について，次のように断っている。

> 小生（ラシード）はこの『集史』の執筆を命じられたので，各民族の有名な書物の中に記されており，各民族のところで途切れることない伝承として知られていたところのもの，そして，各民族の権威ある知識人・碩学たちが自身の信じるままに語ったところのものを，一切の変更・改編・改変のないそのままの手法で記す。[JTM : I 12]

ただし，その情報源となったのがカーシャーニーの『歴史精髄』であった点，カーシャーニーの著作活動は，本来はラシードの『集史』編纂とは別のものであった点には注意しなければならない。

Ⅵ　『歴史精髄』に対する評価

カーシャーニーがラシードの助手の一人ではなく，独立した歴史家であったことは同時代の歴史家の証言からも明らかである。例えば，ムスタウフィーは，ルリスターン地方の歴史と地誌を書く際に『歴史精髄』を一次史料として利用している［TG : 537 ; NQ : 192, 281］。現存する『歴史精髄』の写本にはルリスターンの章は存在していないが，表1で提示した章構成よりも更に多くの王朝を対象とする歴史書であった可能性すらある。

さらに，カーシャーニーと彼の著作『歴史精髄』は，アバルクーヒー Abarqūhī『歴史の天国 *Firdaws al-Tawārīkh*』（1406年）［FT : 3b］，ムハンマド・ムーサウィー Muḥammad Mūsawī『正しき歴史 *Aṣaḥḥ al-Tawārīkh*』（1428-47年頃）［AT : 2b］，ミールハーンド Mīr-khwānd『清浄園 *Rawḍat al-Ṣafā*』（1498年）［RS : 17］，ムスリフ・ラーリー Musliḥ Lārī『時代の鏡 *Mir'āt al-Adwār*』（1566年）［MA : 5a］，ビドリースィー Bidlīsī『栄誉の書 *Sharaf-nāma*』（1596年）［SHN : 23］といった作品の中でも言及されており，後世の歴史家

41）『集史』総序文の目次によれば，第2巻の構成は第1部 bāb「オルジェイト史」と第2部「世界史」の2部構成となっている。第2部「世界史」は第1章 qism「諸民族の歴史」と第2章「続編」の2章構成となっていて，第1章「諸民族の歴史」は，第1節 faṣl「アダムから現在に至る預言者・カリフ・諸王・世界の諸民族」と第2節「世界の諸民族」の二つに分かれる［JTM : I 19-20］。この「章 qism」という単語は，第2巻「世界史」では「諸民族の歴史」の更に小さい単位の「イスラーム前史」と「イスラーム史」を区別する際に用いられている。ラシードが総序文で明示した巻構成と実際の構成は一致しないのである。

の間でも名の知られた存在であった。カーシャーニーをラシードの助手とする評価は，ラシードを高く評価してきた現代の歴史家により創り出され，その真正を確かめないまま再生産され続けてきたものに過ぎないのである。

おわりに

カーシャーニーによる世界史編纂は，ガザンの意志により始められ，彼の著作『歴史精髄』は，ラシードの『集史』よりも早く編纂され，より広い地域を対象とした世界史であった。一方，ラシードの『集史』第2巻「世界史」は，既に編纂されていた『歴史精髄』に全面的に依拠して成立した作品にすぎない。したがって，世界史という構成面だけで考えるならば，「史上初の世界史」という評価は，本来『歴史精髄』に対して与えられるべきものなのである（「モンゴル史」が含まれていないことをどう評価するかは別問題になるが）。一方，『歴史精髄』のテクストに少し手を加えて成立した『集史』第2巻「世界史」の細部には，情報源となった『歴史精髄』の記述が残り，『集史』の内容としては不自然な点が散見される。どちらを独立した作品と見なすべきかは，明らかではなかろうか。『歴史精髄』と『集史』の関係性については，これまでもたびたび指摘されてきていたが，テクストが刊行されていなかったこと，そして，何よりもラシードを偉大な歴史家だとする我々の先入観により，『集史』を「史上初の世界史」と考える定説が再検討されることはなかったのである。ところで，『歴史精髄』には，「ルーム・セルジューク朝史」など『集史』編纂の際に採用されなかった同時代の記述も幾らか含まれている。『歴史精髄』は，単に『集史』編纂に関する新見解を提示するだけに留まらず，イルハーン朝時代の歴史を再構成する上でも大きな可能性を秘めているのである。この点については，稿を改めて論じたい。

＊本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費），松下幸之助記念財団研究助成，平和中島財団日本人留学生奨学金による研究成果の一部である。

参考文献

AA : Rashīd al-Dīn, *As'ila wa Aj'iba-yi Rashīdī*, ed. R. Sha'bānī, Vol. 2, Islamabad, 1371.

AJI[1] : Abū al-Qāsim Qāshānī, *'Arā'is al-Jawāhir*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Ayasofya 3614.

AJI[2] : Abū al-Qāsim Qāshānī, *'Arā'is al-Jawāhir*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Ayasofya 3613.

AJL : Abū al-Qāsim Qāshānī, *'Arā'is al-Jawāhir*, London, British Library, MS. Or. 9605.

AT : Muḥammad b. Faḍl-Allāh al-Mūsawī, *Aṣaḥḥ al-Tawārīkh*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Turhan Valide Sultan 224.

BH : Rashīd al-Dīn, *Bayān al-Ḥaqā'iq*, ed. H. Rajab-zāda, Tehran, 1386.

FT : Abarqūhī, *Firdaws al-Tawārīkh*, St. Petersburg, National Library, MS. Dorn 267.

JTB : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh : Tārīkh-i Banī Isrā'īl*, ed. M. Rawshan, Tehran, 1386.

JTE : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Edinburgh, Edinburgh University, MS. Or. 20.

JTF : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh : Tārīkh-i Ifranj, Pāpān wa Qayāṣira*, ed. M. Rawshan, Tehran, 1384.

JTG : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Tehran, Golestān Palace Library, MS. 2256.

JTH : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh : Tārīkh-i Hind wa Sind wa Kashmīr*, ed. M. Rawshan, Tehran, 1384.

JTI : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh : Tārīkh-i Ismā'īliyān*, ed. M. Rawshan, Tehran, 1387.

JTII : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh : Tārīkh-i Īrān wa Islām*, ed. M. Rawshan, 3 vols., Tehran, 1392.

JTK : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh : Tārīkh-i Aqwām-i Pādshāhān-i Khatāy*, ed. M. Rawshan, Tehran, 1385.

JTL : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, London, British Library, MS. I. O. Islamic 3524.

JTM : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, ed. M. Rawshan and M. Mūsawī, 4 vols., Tehran, 1373.

JTME : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Tehran, Mellī Library, MS. F1606.

JTMS : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Tehran, Majles Library, MS. 8734.

JTQ : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Qom, Masjed-e A'ẓam Library, MS. 3569.

JTR[1] : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, St. Petersburg, National Library, MS. PNS46.

JTR[2] : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, St. Petersburg, National Library, MS. Khan 62.

JTR[3] : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, St. Petersburg, National Library, MS. PNS47.

JTS : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh : Tārīkh-i Āl-i Salchūq*, ed. M. Rawshan, Tehran, 1386.

JTT[1] : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Istanbul, Topkapı Palace Library, MS. Hazine 1654.

JTT[2] : Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Istanbul, Topkapı Palace Library, MS. Ahmet III 2935.

KS : Rashīd al-Dīn, *Kitāb al-Sulṭānīya*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Turhan Valide Sultan 325.

KT : Rashīd al-Dīn, *Kitāb al-Tawḍīḥāt*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Kılıç Ali Paşa 835.

KZ : Kātib al-Jalabī, *Kashf al-Ẓunūn 'an Asāmī al-Kutub wa al-Funūn*, Vol. 2, Beirut, 1990.

LH : Rashīd al-Dīn, *Laṭā'if al-Ḥaqā'iq*, ed. Gh. Ṭāhir, 2 vols., Tehran, 2537.

MA : Muṣliḥ al-Dīn al-Lārī, *Mir'āt al-Adwār*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Ayasofya 3085.

MAA : Ibn al-Fuwaṭī, *Majma' al-Ādāb*, ed. M. al-Kāẓim, Vol. 1, Tehran, 1416.

MT : Rashīd al-Dīn, *Miftāḥ al-Tafāsīr*, ed. H. Rajab-zāda, Tehran, 1391.

MTR : Rashīd al-Dīn, *Majmū'a-yi Taṣānīf-i Rashīdī*, Paris, National Library, MS. Arabe 2324.

NQ : Ḥamd-Allāh Mustawfī, *Nuzhat al-Qulūb*, ed. G. Le Strange, Leiden and London, 1915.

RS : Mīr-khwānd, *Rawḍat al-Ṣafā*, ed. 'A. Parwīz, Vol. 1, Tehran, 1338.

SHN : Sharaf Khān Bidlīsī, *Sharaf-nāma*, ed. V. V. Zernof, Tehran, 1377.

SHP : Rashīd al-Dīn, *Shu'ab*, Istanbul, Topkapı Palace Library, MS. Ahmet III 2397.

TG : Ḥamd-Allāh Mustawfī, *Tārīkh-i Guzīda*, ed. 'A. Nawā'ī, Tehran, 1364.

TS : Hindūshāh b. Sanjar Nakhjiwānī, *Tajārib al-Salaf*, ed. 'A. Iqbāl, Tehran, 1357.

TUA : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Tārīkh-i Ūljāytū*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Ayasofya 3019/3.

TUH : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Tārīkh-i Ūljāytū*, ed. M. Hamblī, Tehran, 1384.

TUP : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Tārīkh-i Ūljāytū*, Paris, National Library, MS. Suppl. persan 1419.

WN : Rashīd al-Dīn, *Waqf-nāma-yi Rab'-i Rashīdī*, ed. M. Mīnuwī and Ī. Afshār, Tehran, 2536.

ZTB : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Zubdat al-Tawārīkh*, Berlin, State Library, MS. Minutoli 237.

ZTI : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Zubdat al-Tawārīkh*, ed. M. T. Dānish-pazhūh, Tehran, 1366.

ZTS : Khwāja Imām Ẓahīr al-Dīn Nīshābūrī, *Saljūq-nāma*, ed. I. Kh. Afshār, Tehran, 1332.

ZTT[1] : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Zubdat al-Tawārīkh*, Tehran, Tehran University, MS. 9067.

ZTT[2] : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Zubdat al-Tawārīkh*, Tehran, Tehran University, MS. Adabīyāt 35J.

ZTT[3] : Abū al-Qāsim Qāshānī, *Zubdat al-Tawārīkh*, Tehran, Tehran University, MS. 5715.

Afshār, Ī. (1386) Dībācha. In : Afshār, Ī. (ed) *'Arā'is al-Jawāhir wa Nafā'is al-Aṭā'ib*. Tehran, v-xxiv.

Afshār, I. Kh. (1312) Saljūq-nāma-yi Ẓahīrī-yi Nīshābūrī wa Rāḥat al-Ṣudūr-i Rāwandī. *Majalla-yi Mihr* 2(1), 26-30.

Āl-i Dāwūd, 'A. (1373) Abū al-Qāsim Kāshānī. In : *Dā'irat al-Ma'ārif-i Buzurg-i Islāmī* VI, 173a-174a.

Allan, J. W. (1973) Abū'l-Qāsim's Treatise on Ceramics. *Iran* 11, 111-120.

Blair, Sh. (1995) *A Compendium of Chronicles : Rashid al-Din's Illustrated History of the World*. London.

Blochet, E. (1898) Études sur l'histoire religieuse de l'Iran. *Revue de l'histoire des religions* 38(1), 26-63.

Blochet, E. (1905) *Catalogue des manuscrits persans de la Bibliothèque Nationale* I. Paris.

Blochet, E. (1910) *Introduction a l'histoire des Mongols de Fadl Allah Rashid ed-Din*. Leiden・London.

Boyle, J. A. (1971) Rashīd al-Dīn : The First World Historian. *Iran* 9, 19-26.

Bregel, Yu. E. (1972) *Persidskaia Literatura* I. Moscow.

Browne, E. G. (1908) Suggestions for a Complete Edition of the Jami'u't-Tawarikh of Rashidu'd-Din Fadlu'llah. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 17-37.

Browne, E. G. (1951) *A Literary History of Persia* III. Cambridge.

Daftary, F. (2004) *Ismaili Literature : A Bibliography of Sources and Studies*. London and New York.

Dānish-pazhūh, M. T. (1339) *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitāb-khāna-yi Dānish-kada-yi Adabīyāt*. Tehran.

Dānish-pazhūh, M. T. (1345) *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitāb-khāna-yi Markazī-yi Dānish-gāh-i Tihrān* XV. Tehran.

Dānish-pazhūh, M. T. (1357) *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitāb-khāna-yi Markazī wa Markaz-i Asnād-i Dānish-gāh-i Tihrān* XVI. Tehran.

Dānish-pazhūh, M. T. (1364) *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitāb-khāna-yi Markazī wa Markaz-i Asnād-i Dānish-gāh-i Tihrān* XVII. Tehran.

Gray, B. (1978) *The World History of Rashid al-Din : A Study of the Royal Asiatic Society Manuscript*, London.

Ḥakīm, M. Ḥ. (1386) *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Madrasa-yi Qanbar 'Alī Khān (Ḥaḍrat-i Walī 'Aṣr)*. Tehran.

Inal, S. G. (1965) *The Fourteenth-Century Miniatures of the Jāmi' al-Tavārīkh in the Topkapi Museum in Istanbul, Hazine Library No. 1653*. PhD thesis, The University of Michigan. Michigan.

Iqbāl Āshtiyānī, 'A. (1324) Nuskha-hā-yi Muṣawwar-i Jāmi' al-Tawārīkh-i Rashīdī. *Yādgār* 2 (3), 33-42.

Jahn, K. (1963) Study on Supplementary Persian Sources for the Mongol History of Iran. In : Sinor, D. S. (ed) *Aspects of Altaic Civilization*. The Hague, 197-204.

Jahn, K. (1965) *Rashīd al-Dīn's History of India : Collected Essays with Facsimiles and Indices*. The Hague.

Jahn, K. (1967) Rashīd al-Dīn as World Historian. In : Bečka, J. (ed) *Yádnáme-ye Jan Rypka : Collection of Articles on Persian and Tajik Literature*. Prague, 79-87.

Melville, Ch. (1998) The Īlkhān Öljeitü's Conquest of Gīlān (1307) : Rumour and Reality. In : Amitai-Preiss, R. & Morgan, D. O. (eds) *The Mongol Empire and Its Legacy*. Leiden, Boston and Köln. 73-125.

Melville, Ch. (2008) Jāme' al-Tawārīḵ. In : *Encyclopaedia Iranica* XIV, 462a-468b.

Melville, Ch. (2012) The Mongol and Timurid Periods, 1250-1500. In : Melville, Ch. (ed) *Persian Historiography*. London and New York. 155-208.

Meredith-Owens, G. M. (1968) *Handlist of Persian Manuscripts 1895-1966*. London.

Morton, A. H. (2004) *The Saljūqnāma of Ẓahīr al-Dīn Nīshāpūrī*. Cambridge.

Morton, A. H. (2010) Qāshānī and Rashīd al-Dīn on the Seljuqs of Iran. In : Suleiman, Y. (ed) *Living Islamic History : Studies in Honour of Professor Carole Hillenbrand*. Edinburgh. 166-177.

Mudarrisī Zanjānī, M. (1364) Muqaddama-yi Muṣaḥḥiḥ. In : Mudarrisī Zanjānī, M. (ed) *Majma' al-Tawārīkh al-Sulṭānīya*. Tehran, 1-57.

Murtaḍawī, M. (1385) *Masā'il-i 'Aṣr-i Īlkhānān*. Tehran.

Nafīsī, S. (1363) *Tārīkh-i Naẓm wa Nathr dar Īrān wa dar Zabān-i Fārsī tā Pāyān-i Qarn-i Dahum-i Hijrī* I-II. Tehran.

Pertsch, W. (1888) *Verzeichniss der Persischen Handschriften der Koniglichen Bibliothek zu Berlin*. Berlin.

Pfeiffer, J. (2013) The Canonization of Cultural Memory : Ghāzān Khan, Rashīd al-Dīn, and the Construction of the Mongol Past. In : Akasoy, A., Burnett, Ch. and Yoeli-Tlalim, R. (ed) *Rashīd al-Dīn : Agent and Mediator of Cultural Exchanges in Ilkhanid Iran*. London and

Turin, 57-70.

Qazwīnī, M. (1339) Ḥawāshī-yi Marḥūm Qazwīnī bar Kitāb-i Introduction a l'histoire des Mongols de Fadl Allah Rashid ed-Din par E. Blochet. 1910. *Nashrīya-yi Dānish-kada-yi Adabīyāt-i Tabrīz* 12(3), 288-300.

Qazwīnī, M. (1363) *Yād-dāsht-hā-yi Qazwīnī*, ed. Ī. Afshār. III. Tehran.

Rice, D. T. and Gray, B. (1976) *The Illustrations to the 'World History' of Rashīd al-Dīn*. Edinburgh.

Riḍā Dālwand, Ḥ. (1382) Zubdat al-Tawārīkh-i Jamāl al-Dīn 'Abd-Allāh Kāshānī wa Dast-niwīs-i Tiflīs. *Āyina-yi Mīrāth* 21, 72-85.

Ṣafā, Dh. (1372) *Tārīkh-i Adabīyāt dar Īrān* III(2). Tehran.

Schefer, Ch. (1895) Notice sur les relations des peuples musulmans avec les Chinois. In : *Centenaire de l'École des Langues Orientales Vivantes 1795-1895*. Paris, 1-43.

Soucek, P. P. (1985) Abu'l-Qāsem 'Abdallāh Kāšānī. In : *Encyclopaedia Iranica* I, 362b-363a.

Tauer, F. (1931) Les manuscrits persans historiques des bibliothèques de Stamboul. *Archiv Orientální* 3(3), 462-491.

Togan, Z. V. (1964) Reşîd-üd-Dîn Tabîb. In : *İslâm Ansiklopedisi* IX, 705b-712b.

Watson, O. (1985) Abū Ṭāher. In : *Encyclopaedia Iranica* I, 385a-387a.

赤坂恒明 (1994)『五族譜』と『集史』編纂『史観』130, 47-61.

岩武昭男 (1994) ラシードゥッディーンの著作活動に関する近年の研究動向『西南アジア研究』40, 55-72.

宇野伸浩 (2011)『集史』第1巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題 吉田順一 (監修), 早稲田大学モンゴル研究所 (編)『モンゴル史研究：現状と展望』明石書店, 44-64.

白岩一彦 (1995)『集史』研究の現状と課題『日本中東学会年報』10, 179-198.

杉山正明 (2004) 西暦1314年前後の大元ウルス西境：『オルジェイト史』より 『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会, 334-370.

本田實信 (1984) イラン 『アジア歴史研究入門4 内陸アジア・西アジア』同朋舎, 593-662.

(日本学術振興会／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)